

家庭経済学への計算的主題の導入について

乗本 秀樹

On Introduction of Computation Subjects into Family and Consumer Economics

Hideki NORIMOTO

要 旨

外部化されてしまっている生活経済計算機能があらためて内部化されることが期待されるが、そのためには、構想力に支えられる「技術」的・全体的過程に生活経済計算が位置づけられるのが望ましい。そのうえで、家庭経済学の構造分析成果とむすびつけられながら教育の方法が模索されるべきであろう。

1. はじめに

家庭経済学では、主に、社会経済の動勢と関連づけながら労働・消費構造の分析や資産保有・収支構造の分析が行われてきた¹⁾。これに対して、家庭経済学の諸概念を実生活で活用することについては必ずしも関心が強くなかった。そのために、経済計算の演習などが行われることはほとんどなかった。

このような傾向から脱して、家庭経済学に、そして家政系学部・学科の経済関連授業に生活経済計算を積極的にとり入れてはどうか²⁾。すなわち、預貯金、ローン返済、税、社会保障費、家事労働評価、消費者物価、中長期資金循環等の計算のすべてを企業や行政などのサービスに依存してしまうのではなく、生活者自身も試みてはどうか。そして、みずからの生活設計に生かしたり他人の生活設計に助言する、あるいは計算過程を知ることによって社会や生活への洞察を深めたり企業等とのあいだで対話を充実してはどうか。

しかしながら、筆者の試みによると、生活経済計算を大学生対象の授業にとり入れることは難しい。自分で計算できることを知って新鮮な驚きが学生から示されることもあるが、ともすれば、生活に役立つかどうかかわからない晦渋な授業、計算への興味が高まることも生活を深く理解することもない半端な授業になってしまう。その理由として、十分な授業時間を確保できない学務上の事情、衣食住などにくらべて経済や経営に関心が乏しい学習動機上の事情が予想される。そして、こうした理由とともに切実に感じられるのが、生活経済計算をどのような営みとして理解したらよいか、という問題である。

そこで本稿では、主に文献によりながら、生活経済計算という行為ならびに生活経済計算授業の要諦についててがかりを得ておきたい。

2. 生活経済計算への懐疑

生活する主体がみずから経済計算することの意義と可能性については、つとに力説されている³⁾。それにもかかわらず、いまだに十分な展開をみていない。

その理由として容易に想像されるのは、計算が難しく煩わしく感じられることである。人それぞれに

好き嫌いや得手不得手があり、誰もが経済計算に親しめるわけではない。計算に苦痛を覚える人さえいる。だからといって、たとえば「学習上の不平等を生むから大学教育に生活経済計算の導入は不可」と考えるのは性急に過ぎる。みずから計算して意思決定することは生活主体が本来もっているはずの権能であり、むしろ、生活主体がこの権能を行使しやすい環境こそが整えられなければならない。そして、計算が苦手な生活者たちが疎外されることのない支援システムが充実されなければならない。また、どの年齢でどのような学習内容がふさわしいかについて、発達心理学などの成果をふまえながら検討することも望まれよう⁴⁾。

こうした要因とともに、生活経済計算が十分に展開しない他の要因として推察されるのが、経済計算に対して私たちが抱く先入観である。この先入観は、古くから散見される考え方や感じ方と共通するようである。

たとえば、J. J. ルソーやC. ヴァグネルは次のように言う^{5, 6)}。

「誠実なふるまいの高貴な性格を卑しめ、その清廉さをけがすような金銭的なもの…。金銭的な必要に苦しんでいる人たちを助けようと熱心になるのはいい。しかし、人生の日常の交際においては、おのずから生まれる好意と愛想のいい態度とに、すべてを一任することにしよう。そして金銭的な、あるいは商売的ななものか…清らかであふれる泉に近づいて、その水を腐敗させたり、変質させたりしないように心がけよう。オランダでは、人々は時間を知らせたり道を教えたりするのも金を払わせるということである。そんなふう人間としてのもっとも単純な義務をさえ取引の対象にする国民はまことに軽蔑に値する国民と言うべきだろう。」(『孤独な散歩者の夢想』、161頁)

「われわれは経済的事実の前に頭を下げ、生活上の諸々の困難を認めないわけにはゆきません。家族の者に衣食住を与え、家族の者を育ててゆくには、われわれの行動手段に工夫をこらすことが日に日にますます焦眉の急となっています。…とはいえ、この種の心配にばかり没頭していたら、われわれはどうなるでしょう?…高らかに言おうではありませんか。世の中が維持されているのは、あまり厳密に計算をしない幾人かの人々のおかげなのです。最も美しい奉仕や、最もつらい仕事は、概してほとんど報われないか、全く報われないものです。」(『簡素な生活』、138-140頁)

あるいは、大熊信行は次のように言う⁷⁾。

「営利的生産者を中心とする思考…から生まれた消費経済の概念を、わたしたちの日常の生活的・実践的な思考の中に導き入れるということが、いかに不適當なことであるか…。」(『家庭論』、225-226頁)

ルソーやヴァグネルにおいては18世紀から19世紀にかけて西欧で進みつつあった市場化が、大熊においては20世紀初頭の日本の市場経済の発展が、生活場の様相や人々の生活感(観)を変えてしまうのではないかと危惧された。

H. ベルグソンは、計算や数値を含む悟性が、「持続」というのびやかで共感的な心身の動きをぎこちなくしてしまうと言う⁸⁾。

「すべてを持続ノ相ノモトニ…見る習慣をつけましょう。そのとき、知覚は電撃を受けて、その中のこわばっていたものはほぐれ、眠っていたものは目ざめ、死んだものはよみがえってきます。」(『哲学的直観』、132頁)

「動きつつあるもののうちへ入り込み、事物の生命そのものをわがものとする直観的認識…。持続の直観もひとたび悟性の光にさらされれば、ただちに凝固した、分明な、不動の概念となってしまう。…悟性は…停止点を表示することに熱中しており、その示すものは出発点と停止点である。」(『形而上学入門』、99-101頁)

大熊やベルグソンの所見は、数値や計算ならびにその背後にある論理の「組み込み」によって、私たちの心身が変えられてゆくことへの懸念でもあった^{9, 10)}。

あるいは、子どもの生活に即した教材論を展開するJ. デューイは経済計算学習にこだわらない。経済のしくみを子どもが理解するのが先決であり、現実に用いられないような計算を学ぶのは論外とも言う¹¹⁾。

「学校と産業生活とのあいだにも有機的な関係が存在すべきである。だが、それは学校は子どもをなんらか特定の職業にむかって準備すべきであるということの意味するのではない。…十二、三歳の子どもたちが利益や損失の計算をやり、さては銀行家でさえとうの昔につかわなくなっているほどの複雑な、種々なる形式の銀行割引の計算をやっているのである。…青少年は、現代生活の一要素としての銀行に通曉し、それがいかなることを営むものであるか、またいかにして営まれるものであるかを知るようにならなければならない。かくしてはじめて〔銀行の業務に〕関連する算術的な過程が或る意味をもつようになるであろう…。」(『学校と社会』、82-84 頁；[] 内は原訳文)

任意にとりあげた以上の諸例で、生活する人々が生活経済計算することが真っ向から否定されているわけではない。しかし、これらの文献で、生活経済計算という行為はけっして尊重されていない。むしろ濃厚に感じられるのは、「生活場や人間の生き生きとした活力と生活経済計算とはなじまないのではないか」という懐疑である。

資本主義経済社会の草創期からあちこちで表明され続けてきた愁訴に、現代の私たちもとらわれることが多い。この愁いをどのように反芻しどのように乗り越えるかは、生活経済計算の導入に先立つ課題である¹²⁾。

3. 生活主体と経済計算過程

生活の諸局面について、その状態をみずから計数把握する。あるいは、他から数値が与えられる。これらの数値を自身の生活の目的や目標にむすびつけるとともに、適宜に加工計算して行動選択に供する。——生活にはこのような過程が多く展開する。そうした計算過程のうちで貨幣表示をとまなうものを、経済計算過程と呼ぶことにしよう。

日常生活に展開する計算ないし経済計算の過程は、研究や教育でどのようにとらえられているだろうか。意識するかしないかはともかくとして、私たちは次のような計算過程観を基調としているのではないか。

- ① 私たちは、さまざまに行動選択できる。ビールとワインを適宜に組み合わせるし、ビールとガソリンと書物に予算を充てることもできる。それは、快(幸福、満足、効用)の多少が精妙に比較衡量されるからである。I. カントにおける快に関する所説、あるいはH. H. ゴッセンや近代経済学における限界効用理論は、このことを示す^{13, 14)}。とくに、「加重限界効用均等の法則」(各財の1円当たりの〈追加消費から得られる追加満足量〉が等しくなるところで、最適購入量が決まる)は、市場に組み込まれた生活主体が比較衡量する可能性をより厳密に示す¹⁵⁾。

とはいえ、精妙で厳密なこの過程を生活者自身が覚知することはあまりない。むしろ、「よく考えて買おう」とする配慮のうちに、おのずと展開する。

- ② 数値を自覚して生活管理するよう、生活主体が促される。すなわち、栄養、衛生、経済などの万般にわたって、望ましい数値が示される。それらの数値が個人や家庭で調整されて、達成基準やチェックポイントにされる。摂取熱量1日2500kcal、CO₂年間削減量100kg、食費1月7万円、…といったように、生活の目的・目標に関連づけられつつ、数値の達成が励行されるのである¹⁶⁾。「この関連づけ(コード)を心身に定着させることは、生活管理力の向上であり人間としての成長である」とも言える。家庭科や家政教育が熱心に取り組んできたところである。

これらの計算過程観のそれぞれに対して望まれることがらをふまえるとき、次のような計算過程観が新たに展望される。

- ③ [①に対して] 快や利得の多少を基準にして行動選択されるのであるが、何をもって快や利得とされるかは実にさまざまである。これらの内容ははじめから決められているのではなく、生活や人生の展開過程、あるいは他者との競争や協働の経験のなかで形成される。社会的・歴史的に形成される経済的心身（快や利得の感覚）のもとで、行動が選択されるのである。これは、P. ブルデュの「ハビトゥス」にうかがわれる経済計算過程でもある¹⁷⁾。近年子どもの金銭・物感覚のありようがとりあげられることが多いが、たとえば「もったいない」の意味とその変容について、この視点から調べてゆくことが必要であろう。
- ④ [②に対して] 日常生活での目安や心がけにとどめないで、生活設計のために経済計算や数値基準設定を戦略的に行う。それによって、中長期の視野で就業や消費活動や行事の計画をたてる際の判断のよりどころ、ならびに企業等とのあいだに長期固定的な経営経済関係を取りむすぶ際の判断のよりどころを得ることができる。

家庭経済をめぐる研究や教育で③と④がともに活発に展開されることが望まれるが、本稿で注目するのは④である。

4. 生活経済計算と全体性

消費財や労働や資金の市場と密接な関係を保つことはいまや避けられないが、市場の力に圧倒されない生活場でありたい。生活を計数的に管理することは不可欠であるが、きこちなさに陥ることのない、しなやかで生き生きとした営みでありたい。また、生活や人生の転換点や正念場では、自前の計算にもとづく判断をもふまえて戦略を練りたい。

先の2節から得られたのは、このような姿勢についての示唆である。このことは、④の生活経済計算がたんに電卓を叩いたり公式を機械的に適用するような行為ではないことを、それどころか生活場の状況とともに広く深く把握されなければならない行為であることを意味する。「ローンと長期資金計画」という仮設例によって、生活経済計算が行われる様子を見当づけておこう。

[状況] いま40歳の夫婦。新居を得るために住宅ローンを決意しつつある。しかし、ローンを背負って今後無事に過ごせるか、老後の入り口はどうなるか、心配だ。そこで、夫の退職時までの資金循環を試算する。

[試算1] 今後20年間の主なできごと・企画費用、日常生活費、ローン返済額、私的・社会的保険料などの支出、夫婦の収入、収支差額、年度末貯蓄残高、正味金融資産残高などを予測する。

その結果、正味金融資産残高が赤字で推移した後に、最終年(60歳)に黒字になるとしよう。途中の窮地をどうきりぬけるかが問題だが、プラスの金融資産が形成されるならば幸いだ。しかし、退職後に無就業であって65歳年金受給開始を選ぶと、5年間は毎年少額でのやりくりが求められる。

[焼き直し1] 今後20年間の支出の見直しを図るが、多くの削減は難しい。逆に、わずかだが収入を増す手だてを考えることもできる。しかし、肝要なのは、「もっている生活力(金、時間、気力・体力など)をフルに使ってより有意義な人生と生活を送る」よう考え描くことだ。たとえば、妻が、「待つ」主婦生活や税・社会保障料の負担を気にするパート生活から解放されて、小さいながら起業に挑む。新築住居にこだわらないで、よく住まれた中古住宅を入手してリフォームする、等々。

[試算2] あらためて試算する。その結果、先の試算より多くの正味金融資産形成を予想できるかもしれない。そのとき、退職直後の5年間においても必要とされる日常生活費額以上の支出が可能だろうし、妻の起業により夫の退職後もいくらかの収入が見込まれよう。しかし、住宅ローンの重みは逃れ難く、資金繰りの悪い期間が続くことは避けられまい。

[焼き直し2] 必要に応じて、さらに対応を考える。ここでは、「子どもの結婚費用は子供自身が負担すべきか」「学習塾は不可欠なのだろうか」といったように、これまでの生活慣習や生活文化を問い直すことも必要だろう。

[意思決定] 試算と焼き直しを繰り返した後に、ローンの金額・融資条件ならびにその他の諸事項を決める。そして、実行する。実行の過程では、家庭内外に予期しない変化があるだろう。その都度に焼き直しと試算を行って、よりよいかたちを描き選ぶ。

すなわち、生活の状況のなかで目的や目標が明らかになる。その目的や目標を実現するために、暮らしぶりから仕事ぶり、経済から文化にまで及ぶ構想をふまえて、生活と人生の具体的なかたちが描かれる。そして、それらのかたちについて、客観的資料と合理的計算によって実現の可能性が見当づけられる(統計から得られる資料、自身が作成する資料、社会制度に支えられる算式、試算の表など)。もし実現が困難なようであれば、是正の方策が模索される。こうして、生活に新しいかたち、または新しいかたちをめざしての進行が始まる。

このように、生活経済計算は、全体的な過程のなかの不可欠の一環をなしている。

5. 生活経済計算という技術

以上の例からわかるように、生活経済計算はすぐれて主体的な営みの一環をなす。その営みは、調理のために、会得された技能と知識を意識的に適用するのにも似ている。あるいは、野菜栽培のために、修得された生物学的知識を意識的に適用するのにも似ている。生活経済計算が「意識的に適用される」全体的な過程は、調理や野菜栽培に類する「技術」の過程ではないか。

と言っても、社会的労働すなわち「生産的实践」を対象とした技術学説を、私的消費上の経済計算に関して援用するのは場ちがいである¹⁸⁾。筆者はそれでもなお「意識的適用」という主体的契機を重視したいのであるが、そのためには三木清の技術観が参考になる。

三木は、「主観的な目的」と「客観的な法則の知識」の統一として、「特殊」と「一般」の統一として、技術をとらえる。「新しい形を作る」この統一は、野菜栽培や自動車製造のような物生産だけでなく、文化的なことから「人間の形成」をも対象とする。当然、人生や生活の様式を創造したり、生活の水準を向上させることも対象とされる¹⁹⁾。

「科学は直接に物を作るのではなく、物を作るのは技術である。技術的に作られたものはすべて形をもっている。技術においては、先ず客観的な法則の知識、次に主観的な目的があり、両者の統一が求められるが、この統一は物を変化して新しい形を作ることに於いて実現される。科学の理念が法則であるに対して、技術の理念は形である。形は主観的・客観的なものであり、また抽象的・一般的なものでなく、一般的なものと特殊なものとの統一として具体的なものである。」(『哲学入門』、50頁)

「あらゆる歴史的なものは主観的・客観的なものであり、形のあるものである。それは技術的に形成されたものである。文化も技術的に作られ、社会の制度や組織の如きも技術的に作られる。すべて歴史的なものは技術的に形成されたものとして、環境的に限定されると共に主体的に限定され、主観的であると同時に客観的なもの、一般的であると同時に特殊なものである。」(同上、130頁)

この統一は「構想力」に導かれる。これは、「構想力の根柢に意志があるのではなく、むしろ意志の根

根に構想力がある」(『構想力の論理 第一』、37頁)と言われるほどに根源的な契機である²⁰⁾。

「人間は現在の感覚の狭い世界のうちのみでなく、彼の心が過去の感覚印象の生き生きとした形象の群によつて絶えず訪れられる彼自身の広い世界のうちに生活してゐる。人間が彼の人間的な閱歴を始めるのは、この覚めたる夢の広い不思議の国においてである。…彼はそれを物語ることができ、そして物語ることによつてそれに改良を加へることができる。眠の夢にせよ覚めたる夢にせよ、それは物語られなくておくにしては余りに生き生きとしてゐる…」(『構想力の論理 第一』、207頁)

他方で、技術は繰り返されることによって有用になる。繰り返されるうちに「習慣」や「常識」になるのである。

「技術は習慣的になり、習慣的になることによってその意味を発揮する。言い換えると、技術は制度的になるという性質をそれ自身においてもっている。技術の存在の仕方は常識の存在の仕方と類似するところがあるであろう。」(『哲学入門』、50頁)

ただし、慣れることによって自発性のない惰性に陥ってはならない。「イマジネーション」や「構想力」が欠けたこのような事態を、三木は「デカダンス」と呼ぶ(『人生論ノート』、37頁)。デカダンスは、「流行」や「機械技術」の支配によって生じると言う²¹⁾。

「生活の技術の尖端にはつねにイマジネーションがなければならない。あらゆる小さな事柄に至るまで、工夫と発明が必要である。しかも忘れてならないのは、発明は単に手段の発明に止まらないで、目的の発明でもなければならぬということである。…真に生活を楽しむには、生活において発明的であること、とりわけ新しい生活意欲を発明することが大切である。」(『人生論ノート』、125-126頁)

「近代技術が人間生活に及ぼした影響…、この機械技術を支配する技術が必要である。技術を支配する技術というものが現代文化の根本問題である。」(同上、125頁)

以上のような三木の技術観によって、生活経済計算をあらためて技術の一環に位置づけることができる。そのことから得られる示唆は多く、上記の特質の一つ一つが有意義である。

- ア. 生活資材に関する科学的知識やとりひきに関する規則などとならんで、生活経済計算に関する知識は客観的な法則に関する知識である。この知識は、人生や生活のビジョンという主観的な目的が明瞭であるときに有用である。
- イ. 主観的な目的と客観的な法則の知識が統一されるかたちがイメージされることによって、統一への過程が始まる。
- ウ. 現代生活では、生活経済計算に関する知識だけでなく、統一されるイメージまでもが企業等に委ねられているのではないか。そうだとすれば、これは機械技術による支配である。
- エ. 生活経済計算を含む全体的な過程が円滑に展開するためには、繰り返しの訓練が必要である。

6. むすびにかえて

以上の考察から、家庭経済学の研究や教育に生活経済計算主題をとり入れる際に望まれる諸点が明らかになる。それは、計算方法についての知識が確かであること、「意志の根柢に…ある」と言われるイマジネーション(構想力)が健やかであること、ならびに経済計算が用いられる目的(構想内容)が明らかであることである。計算方法に関する知識は何よりもテキストの充実を待つとして、構想力と構想内容の活性化については、どう対応すればよいか。

たとえば大学の授業において、学生が個々の生活事情を参酌しながら生活の問題や人生の課題を描く。あるいは、いわゆる「人生すごろく」を利用する。いずれも捨てがたい方法であるが、これらが自身の生き方と生活スタイルを早々と限定したり、てっとり早く多くの人生局面を仮想させるだけのものであ

てはならない。さまざまな生活様式や生き方を共感的に観察したり生き生きと想像できるものでなければならぬ。そのためには、就業、家族段階、家族意識や資産管理意識、資産保有、収入・支出などの状況において多様な生活実態を把握することが欠かせない。この努力は、従来の家庭経済学による構造分析（本稿冒頭）の方法と成果を新たな視点から生かそうとすることでもある。

【注および参考文献】

- 1) 家庭経済学の傾向については、拙稿「家庭経済学部会報論考の傾向と家庭経済学の枠組み」（日本家政学会家庭経済学部編『家庭経済学研究』第21号、2008年）を参照のこと。
- 2) 商業高校では、「計算実務」等の授業科目が用意されている。現代のビジネス活動を担うために欠かせない知識（たとえば、単利・複利による利息の計算、複利による年金の計算、税金の計算、など）が、ここで伝えられる。生産の側におけるこのような姿勢に対応して、消費の側にも計算的な知識や技術を学ぶ機会が整えられてよいのではないか。
- 3) たとえば、今井光映監修・長嶋俊介編『ライフプランニングガイド試作 ―手書き生活設計のすすめ―』（生命保険文化センター、1987年）、長嶋俊介「資産管理と家計簿 ―生活設計簿と家計簿管理との接点―」（『家庭科学』第52巻第1号、1985年）がある。
- 4) たとえばJ. ピアジェは、青年期という発達の段階は次のような特徴をもつという（ピアジェ（滝沢武久訳）『思考の心理学』、みすず書房、1968年）。

「抽象的知能操作、人格形成、およびおとなの社会へ感情的かつ知的に入り込む…。」（同上、12頁）

「日常的な現実とは無関係な非現実的な問題、または、赤裸々な素朴さで、世界の将来の場面および空想的な場면을予想する…。…抽象的な理論を容易に仕上げる…。…すべての青年はいろいろな点で、世界を変革する体系や理論をもっている…。」（同上、84頁）。

「青年期の形而上学的自己中心性が、だんだんと形式的思考と現実との間の妥協の中で、修正されていく。…その均衡は、ひろく具体的思考の均衡を越える。というのも、この均衡は、現実世界のほかに、合理的推論と内的生活という無限の構造を包み込むからである。」（同上、88頁）

このような時期（段階）ないしそれ以後の時期にある大学生や家庭生活者が、生活経済計算主題に向き合うことに無理はあるまい。
- 5) J. J. ルソー（今野一雄訳）『孤独な散歩者の夢想』、岩波書店、1994年。
- 6) C. ヴェグネル（大塚幸男訳、祖田修監修）『簡素な生活』、講談社、2001年。
- 7) 大熊信行『家庭論』、新樹社、1963年。
- 8) 澤瀉久敬責任編集『ベルクソン ―世界の名著64―』、中央公論社、1989年。
- 9) 市川浩『精神としての身体』、講談社、1992年。

「〈組み込み〉によって、言語や用具は身体化され、あたかも身体の一部であるかのようにはたらく。」（同上、185-186頁）

「生成的構造が言語や用具によって〈伸だち〉されることは、他面、われわれからある意味で独立した言語や用具の論理によって、われわれが貫徹され、支配されることでもある。」（同上、186頁）
- 10) 変えられた心身は、大熊においては資本主義経済を内から支えるが生活とは相容れない感性である。また、ベルクソンにおいては「機械仕掛け」という「笑い」の対象である（ベルクソン（林達夫訳）『笑い』、岩波書店、1989年）。
- 11) J. デューイ（宮原誠一訳）『学校と社会』、岩波書店、1957年。
- 12) 経済計算が家庭経済学に導入されにくい理由には、実務が先行するなかで、論理的に一貫する体系が整っていない事情もあるのではないか。たとえば、元利均等残債返済方式は通常「月利」を用いて複利計算されるが、その「月利」は年利を単純に12で割ることにより算出される。ここには、複利の思考と単利の思考が混在している。
- 13) I. カント（波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳）『実践理性批判』、岩波書店、1979年。同書において、快の比較衡量について以下のように言及される。

「たとえさまざまな対象の表象が、それぞれ種類を異にするにせよ、従ってまた感覚による表象に限らず、これと種類を異にするところの悟性による——それどころか理性による表象であるにせよ、これらの表象を意志の規定根拠に仕立てる当のものが快の感情であるとすれば、この感情…は、それが常に経験的にのみ認識される限り、けっきょく同一種類に属するばかりでなく、欲求能力として発揮される同じ生の力がこの感情によって触発され、しかもこの点に関しては他のいかなる規定根拠とも程度の差しかあり得ないという限りにおいても、やはり同一種類に属するのである。」(同上、55-56頁)

「もし意志規定が、なんらかの原因から期待される快適もしくは不快の感情にもとづくとするれば、表象がどんな仕方でも彼を触発しようと、彼にとってはまったく同じことなのである。この場合に彼が選択を決意するために大事なことは、かかる快適がどれほど強いのか、またどれほど永続きするか、あるいはまたどれほどたやすく得られるか、更にまたどれほどたびたび繰返されるか、ということだけである。」(同上、56-57頁)

「同様に、生の快適だけに専念している人にとっては、表象が悟性によって生じたものであるのか、それとも感性によって生じたものであるのかは、問うところでない。ただその表象が、彼にどれほど多くの、またどれほど大きな快楽を、最も長い時間にわたって与えるか、ということだけが問題なのである。」(同上、57頁；傍点は原訳文)

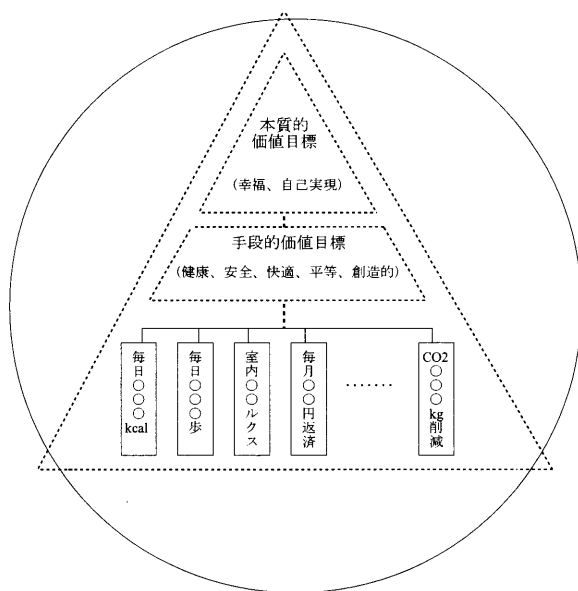
- 14) H. H. Gossen “Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln; Neue Ausgabe”, Verlag von R. L. Prager, Berlin, 1889.

- 15) 篠原三代平・林栄夫・宮崎義一『近代経済学講座 基礎理論編 3 — 価格の理論 —』、有斐閣、1967年。

- 16) その様子は、右図のようである。すなわち、定性的・価値的目標と定量的・基準的目標とからなるコード（三角形）が、心身（円形）を支えるように定着してゆく。

- 17) P. ブルデュ（今村仁司・港道隆共訳）『実践感覚Ⅰ』、みすず書房、1988年。同書によると、「ハビトゥス」は以下のような概念である。

ハビトゥスは、客観主義（レヴィエ＝ストロースやマルクス主義）の行為論と主観主義（サルトルの投企や近代経済学の効用）の行為論の隔たりを埋めようとして提示された。ハビトゥスは、過去の行動の累積や外界の客観的な構造（階層や集団ごとの個性）によって生活単位に形成される身体的・心的な傾向ないし構造であり、仕事・消費・人間関係の運び方に関する動機・知覚・評価のありようである。そこでは、社会秩序（たとえば性別役割分業など）が身体にしみこみ、思考を秩序づけたり相応の感情を誘発する。このハビトゥスに媒介されて実践や表象がなされるが、ハビトゥスをもつ（ハビトゥスに支えられる）主体が明瞭に意識して行動するとはかぎらない。にもかかわらず、瞬時にものごとを決断処理したり危険を回避する。こうして、社会・生活・歴史は、外部構造とハビトゥスの弁証法として展開してゆく。（なお、わが国の農業経営学においても、ハビトゥスに類似する枠組みが形成されている。——社会的・経済的・歴史的条件と個別主体的条件とによって農業経営目標が形成され、経営管理が行われる。その集積ないし動態として、農業・農村の展開がとらえられる。こうした動きを観察することが大切であり、その意味で主観主義や客観主義や規範主義によらない。）



- 18) 三枝博音『技術の哲学』、岩波書店、1973年。同書によると、いわゆる「意識的適用説」技術論者である武谷三男の「技術」は、以下のように説明される。

「彼〔武谷三男〕が『技術概念』として把えたものは、次のような命題に結実している。『技術とは人間実践（生産的実践）における客観的法則性の意識的適用である。』〔武谷『弁証法の諸問題Ⅰ』〕（『技術の哲学』、274頁；[]内は引用者）

なお、三枝の「技術」は次のようである。

家庭経済学への計算的主題の導入について

「私は技術を次のように規定することを試みる。技術とは、人間の実践的生産における客観的な規則による形成の判断力過程である。」(同上、292頁)

- 19) 三木清『哲学入門』、岩波書店、1978年。
- 20) 三木清『構想力の論理 第一』、岩波書店、1939年。
- 21) 三木清『人生論ノート』、新潮社、1996年。

[追記]

本稿は、平成20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「家庭経済教育における計算的内容の充実に関する研究」(研究代表者：乗本秀樹、研究分担者：色川卓男・大藪千穂・関根美貴)を得て第60回日本家政学会大会(平成20年5月31日、日本女子大学)で報告した内容を取りまとめたものである。